

M18a

CHAINプロジェクト海外若手研究者の育成とワークショップ研究成果報告

森田 諭、浅井 歩、中村 尚樹、高棹 真介、山口 雅史、A. Hillier、K. Shaltout、吉永 祐介、柴田 一成、北井 礼三郎、上野 悟、石井 貴子 (京都大学)、大辻 賢一 (国立天文台)、D. P. Cabezas、M.V. Gutierrez、Y.J. Buleje、M. Ishitsuka、J.K. Ishitsuka (IGP, Peru)、R.A. Terrazas、L.M. Martinez (Ica Univ., Peru)

フレア監視望遠鏡 (FMT) は5連式小口径望遠鏡で、太陽大気彩層全面像を、 $H\alpha$ 中心波長及びそのウィング2波長にて同時観測する能力を持つ。FMTは完成以来17年間にわたり研究データを蓄積してきたが、2010年3月にペルー国立イカ大学に新設の太陽研究所に移設された。以後、京大・理・附属天文台の推進する、太陽全面彩層大気の色速度情報を24時間連続観測するための国際ネットワーク (CHAINプロジェクト) の海外第1号望遠鏡として、ペルー国立地球物理研究所 (IGP)、ペルー国立イカ大学の三機関共同で定常観測運用を行っている。

このプロジェクトでは、観測システムの国際ネットワークの構築と共に、海外現地にて観測研究業務に携わる若手研究者の育成が鍵となる。我々はペルー人若手5人を主な訓練メンバーとして2010年度より継続的にこの育成活動を行っており、2010年12月に第一回目の、2011年7月に第二回目のデータ解析ワークショップを行った。本講演では特にペルーでのFMT観測データを用いて解析された2011年7月のワークショップでの研究成果について報告する。解析には、上記FMTと共に、米国SDO衛星AIAの極端紫外線望遠鏡観測データを用いた。これらを比較解析することにより、太陽表面でのフレアに伴う噴出物や、衝撃波の伝播の振る舞いについて、半定量的に調べた。FMTのデータ解析では、クラウドモデルを適用した速度場解析も行った。研究の詳細は、プラズマ宇宙物理セッションの2つのポスター講演 (D.P. Cabezas et.al., R.A. Terrazas et.al.) も参照されたい。